

校長通信

第6号 2016. 09. 29

あなたは、自分の将来について3分間話し続けられますか？

9月24日に京都である調査研究の発表会があり、出席してきました。その発表会とは、京都大学の溝上教授（右の写真）と河合塾がコラボして実施している「学校と社会をつなぐ調査（通称：10年トランジション調査）」第2時点目の報告会です。その報告会の中で、溝上教授が力説していたのは、高校時代のキャリア意識が重要だということです。彼は、高校時代に「自分が将来何をしたいか決まっていることに越したことはないが、決まらなくても良い。自分の将来について考えたことを語ることが大切だ！」と力説していました。そのようなキャリア意識を持っている生徒が、大学に入学してもどんどん伸びていくということです。



【1】10年トランジション調査とは？

溝上教授の問題意識は、

「日本ではトップレベルの人材が集まる京都大学の学生が、なぜ世界で通用しない?!なぜ就職活動で苦勞する?!」

というところからスタートしています。教授が、「社会で成長する大学生ってどんな学生？」という問題意識から始めた大学生調査の結果、成長する学生とそうでない学生と比較した時に、「教室外学習」「対人関係・課外活動」「キャリア意識」に成長する学生の特徴がみられるということがわかりました。次に「伸びる大学生、社会人って、その資質の核は高校時代にあるのではないだろうか？」と考え、調査を始めたのが、この「10年トランジション調査」なのです。大学生の調査で分かった3つの要素が、高校生段階にも散見されるのかどうかという調査です。この調査は、河合塾と協同で当時の高校2年生を対象に10年間に渡って追跡調査を行い、「どんな高校生が、大学、社会で成長するのか？」を明らかにする壮大なプロジェクトです。

調査は、2013年10月～12月に全国378校の高校2年生45,311名が、教室で、あるいはインターネットで調査票に回答。継続調査を承諾した16,829名の生徒が、以後10年間大学生・社会人へつながっていく調査対象者になります。

【2】どんな高校生が大学、社会で成長するのか

2013年に実施した調査結果の報告が本として出版されています。

「どんな高校生が大学、社会で成長するのか—『学校と社会をつなぐ調査』からわかった伸びる高校生のタイプ」

（学事出版：2400円 2015年8月1日 第一版）

です。学術書に近い内容の本で内容は難しいですので、かいつまんでここで紹介したいと思います。

教授は、高校生の1週間の時間の使い方に注目して、高校生のタイプを7つに大別しています。次がそのタイプです。

- ①勉強タイプ・・・他の生徒に比べて「授業以外の学習時間」が長い（平均時間は平日2.73h、休日4.47h）タイプ
- ②勉強そこそこタイプ・・・「授業以外の学習時間」が長いことを特徴として分類されるタイプであるが、勉強タイプより「授業以外の学習時間」がやや短い（平均時間は平日1.85h、休日2.82h）
- ③部活動タイプ・・・他の生徒に比べて、「部活動」の時間が長いこと（平均時間は平日2.63h、休日は4.78h）を特徴として分類されるタイプ
- ④交友通信タイプ・・・他の生徒に比べて「友達と遊ぶ」（平均時間は平日0.56h、休日3.28h）、「友達と電話・LINE・メール交換、ツイッター・SNSなど」（平均時間は平日1.40h、休日2.28h）の時間が長いことが特徴のタイプ
- ⑤読書マンガ傾向タイプ・・・他の生徒に比べて「読書する（マンガ・雑誌を除く）」（平均時間は平日1.98h、休日

3. 05h)、「マンガ・雑誌を読む」(平均時間は平日0.51h、休日0.79h)時間が長いことを特徴として分類されるタイプ

⑥ゲーム傾向タイプ・・・他の生徒に比べて「ゲームをする」時間が長いこと(平均時間は平日2.07h、休日3.40h)を特徴として分類されるタイプ

⑦行事不参加タイプ・・・他の生徒に比べて「学校行事に積極的に参加する」の得点がもっとも低いことを特徴とするタイプ。(唯一1週間の時間の過ごし方で分類されていないが行事参加は高校生にとって大きい要素であるため、あえて分類した。)

さて、あなたはどのタイプが一番近いでしょう？

それぞれのタイプの傾向を詳しく見ていきたいのですが、紙面も少ないので次の4つのタイプに絞りたいと思います。

①勉学タイプ

このタイプは、部活動と両立している者が8割含まれています。(これって注目ですよ、校長より)

「授業の内容を理解している」「規則正しい生活を送っている」「将来海外の大学や学校に行きたい」「将来海外でしごとをしたい」「自分に見どころがあると思う」「進学先についてよく考えている」「進学準備を始めている」「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」の得点^①が他のタイプの生徒に比べて高い。

②勉学そこそこタイプ

「ボランティア活動に参加してきた」は、他の生徒に比べて最も高い。「授業の内容を理解している」「規則正しい生活を送っている」「将来海外の大学や学校に行きたい」「将来海外でしごとをしたい」「自分に見どころがあると思う」「進学先についてよく考えている」「進学準備を始めている」「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」の得点^②が、概ね勉学タイプに次いで高い。

③部活動タイプ

「授業以外の学習時間」が比較的短く、部活動をやりながら授業外学習をあまりしない生徒の多くが分類される。「学校行事に積極的に参加する」「悩み事を相談する友達がいる」は比較的得点が高いが、「進学先についてよく考えている」「進学準備を始めている」「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」の得点^③がかなり低い。良好な友達関係や集団行動には適応しているが、授業外学習はあまりせず、将来のこともあまり考えていないタイプ

④交友通信タイプ

「授業以外の学習時間」が比較的短い、「学校行事に積極的に参加する」「初対面の人とすぐ友達になる」「悩み事を相談する友達がいる」の得点^④が全体の中で最も高い。また「進学準備を始めている」の得点はあまり高くないが、「進学先についてよく考えている」「進学先を卒業後どのような仕事をしたいか見通しを持っている」の得点^⑤が、勉学タイプ、そこそこ勉学タイプについて得点が高い。

【3】第2時点調査でわかったこと！

(1) 半分の生徒は、成長しない！

このように7つのタイプに分類された高校生を対象に、2015年11月—12月に Web 上で調査を実施しました。5,939名が回答し、そのうち大学に進学した4,751名が対象、有効回答をした4,677名が分析対象です。その結果わかったことは、

高校2年次の資質・能力は、大学1年生になっても47%~60%は変化しない。
成長したものはわずか23~24%に過ぎない。その他の生徒は、低下している

つまり、高校2年生の段階で資質や能力が高い生徒は、大学に入っても高い資質能力を有しているし、中程度の者は、中程度、低い者は低いままということなのです。すごい結果が出てしまいました。高校時代を如何に過ごすかが、その後大学生となった時に大きく影響するということです。考えてみれば、「人間、そう簡単には変わることはできないよ」と言ってしまうはその通りなのですが、それにしても高校時代から大学時代というのは、成長の著しいとき。人生観や人間観、生き方・ものの見方が固まっていくときです。言うなれば、人格形成の完成期にあたります。その大事な時期に高校時代から大学時

代にあまり変わらない生徒が、半数いるということはあまりにも悲しい現実のように思います。溝上教授は次のように報告されました。「京大にも入学時の段階で、『この学生しんどいな…』という学生がいるんですよ。そういう学生は、4年たってもやはりしんどくて、就活で苦労している。人間的に成長が乏しいんですね。見ていてつらい気持ちになります。」と。

(2) どんな生徒が大学時代に成長するか？

それでも、約1/4の生徒が大学時代には成長しています。どのような要素が大学1年時の資質・能力の維持あるいは発達に影響しているのでしょうか。報告書には、

「主体的な学習態度」が影響を及ぼしている

と記載されています。「主体的な学習態度」とは、何か？質問項目を見てみましょう。

- ①レポートや課題はただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い。(＊)
- ②レポートは満足がいくように仕上げる
- ③授業には意欲的に取り組む
- ④課題には最小限の努力で取り組んだ(＊)
- ⑤単位さえもらえればよいという気持ちで授業に出る。(＊)
- ⑥課題は納得いくまで取り組む。
- ⑦課せられたレポートや課題は少しでも良いものに仕上げようと努力する。
- ⑧授業はただぼろっと聞いている(＊)
- ⑨プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫のように十分に調べる

注：(＊)は消極的な聞き方をしている逆転項目です。

このような質問項目を5段階の項目で最も近いものに○をつけて選択をするのですが、質問項目をみれば「主体的な学び」とは何かは一目瞭然ですね。あえて説明はいらないと思います。このように、自ら進んで学ぼう、高みを目指そう、自分で満足いくものを追求しようという態度が、大学生の成長を促しているのです。

(3) 「主体的な学び」はどこから生まれるか？

では、この「主体的な学びは」どこから生じるか？という問題になります。そこで、報告書にはこのように書かれています。

「大学1年時の資質・能力の発達をはじめ、学びと成長を促進する『主体的な学習態度』は、高校2年時のキャリア意識、ひいては大学1年時の二つのライフに影響を受けていた。この結果は、大学生の学びと成長が、高校生時のキャリア意識を大学生になって持続・発展させ、それに影響を受けて促されていることを示唆している。」(報告書P3)

つまり、高校時代のキャリア意識が重要と指摘されているのです。若干説明が必要なのが、「大学1年時の二つのライフ」という文言ですが、質問内容は次の通りです。

- ①「あなたは、自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っていますか」
- ②「あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのか分かっていますか？またそれを実行していますか。」

という二つの質問で、「見通しがある、見通しが無い」ということで「二つのライフ」なのです。さて、本題に戻って高校時代のキャリア意識です。質問項目は、このような質問です。

- ①どのような進学先(どの大学、どの学部、どの専門学校など)にするか、どの程度考えていますか
- ②進学準備(受験勉強の開始、進学先に関する本や雑誌を読むなど)を始めていますか
- ③進学先(大学や短大、専門学校など)を卒業した後、どのような職業に就きたいか、どのような仕事をしたいか、その見通しをどの程度持っていますか。

この質問に4段階で答えます。どうですか？生徒のみなさん、特に2年生の生徒のみなさん、どう答えますか？

【4】〇〇高校生に言いたいこと！

(1) 〇〇高校には、勉強タイプはいない

まず、最初に紹介した高校生7つのタイプです。〇〇高校には、「勉強タイプ」はほとんどいないと言っていいでしょう。平日の勉強時間が2.73時間、休日の勉強時間が4.47時間です。どうですか？これほど勉強していますか？次に「そこそ勉強タイプ」ですが、このタイプは〇〇高校にも存在するのではないのでしょうか？でも、それほど多くないと思います。

〇〇高校の多くの生徒は、「部活動タイプ」と「交友通信タイプ」ではないかと思いますが、違いますか？「部活動タイプ」というのは、名称だけ聞くと「頑張っている」と聞こえがいいのですが、要はクラブ中心の生活をしていて、勉強をあまりせず、将来のこともあまり考えていないというタイプの生徒です。「勉強タイプ」や「そこそ勉強タイプ」は、部活

もしっかり取り組んで、尚且つ勉強時間も確保し、将来のこともしっかり考えている生徒です。ここが決定的に違いますね。また、「交友通信タイプ」は、社交的だし、友達も多い。ところが、いざ人前で発表する、プレゼンテーションをする、討論する、自己主張するというような場面、すなわち頭をつかって相手に主張する、理解求める、説得をするというときに、尻込みするタイプです。簡単に言うと、日頃は良くおしゃべりして活発そうに見えるけど、いざというときには力が発揮できないタイプと思ってください。

はっきり言いましょう！今回の溝上教授の調査から、このような〇〇多いタイプの生徒は、大学に進学してもなかなか伸びにくいというエビデンスが示されてしまったのです。これは大変です！〇〇の多くの生徒は、大学進学を希望しています。残念ながら国公立大学を希望しながら、合格者は極わずかです。多くの生徒は、関関同立、産近甲龍をめざして進学していきます。これらは関西では有名な私立大学ですが、いずれもマンモス校です。私が危惧するのは、今のままでたとえ希望する大学に進学できたとしても、〇〇の生徒は、

「その他大勢の中に埋没し、どこにいるかわからなくなる」

ということにならないかということです。このままの状態ですと大学4年間成長せず、能力を伸ばせずいたら、一番苦労するのは就活です。就活とは、「あなたの企業にとって、他の学生を採用するより、私を採用するほうが会社の利益になりますよ」という、まさに激烈な競争の場なのです。大学4年間でどれだけ己を鍛えたかを問われる場だと思ってください。キラリと光る個性と資質・能力を持たなければならないのです。この競争に勝つためには、大学を卒業してから社会で何をしたいのかというキャリア意識を持ち、育て続けなければなりません。

(2)「あなたは、自分の将来について3分間話し続けられますか？」

そこで、今回のタイトル「あなたは、自分の将来について3分間話し続けられますか？」という問いになるのです。今、将来やりたいことが決まっていることに越したことはない。でも、決まっていなくても良いのです。自分自身の将来について、何を考えたかを3分間話せるかということです。これがとても重要なことなのです。高校、大学にかけて、そしておそらく社会人にかけても成長していく原点になることなのです。

そこで、例を紹介しましょう。今回の報告会で京都工繊大学の内村教授が報告してくれた事例です。

<事例紹介A君の場合>

A君の高校時代は、勉強そこそこタイプ（+読書マンガ傾向）で、家庭学習は結構やっていた。対人・コミュニケーション能力はふつう、ところが、キャリア意識が弱かった。

そのA君は、大学入学後自宅から出てひとり暮らしを始めるが、家庭学習が急に少なくなってしまい、ドロップアウトの可能性すら出てきてしまった。要は、何のために大学に入学したかのビジョンを持っていなかったのです。

<事例紹介B君の場合>

B君もA君と同じようなタイプの生徒で、高校2年時まではキャリア意識も低く、漫然と高校生活を送っていた。ところが、友達付き添いで訪れた大学のオープンキャンパスで、ロボット工学を体験し、俄然心に火が付いたのです。京都工繊大学のダビンチ入試（結構ハードルが高いAO入試と理解してください）に合格しました。

大学生になってからは勉強で苦労をしますが、ロボコンサークルに参加。ロボコン全国大会で優勝！希望した会社に就職できました。

この二つの事例を見ただけでも、高校時代のキャリア意識がその後の人生の分かれ目になっていることがわかりますよね。そのほかにも建築を学びたいと京都工繊をめざしたが、どうしても合格できず夜間部合格した生徒が、1年時からオフィスデザインの研究室に通いつめ、昼間の学生と一緒に勉強する中で、キャリアアップを目指して東京の大学院に進学した例も紹介されました。

この秋に卒業生を招いての進路ガイダンスが1年生でも2年生でも開かれました。卒業生は、自分の体験をいろいろ話してくれました。「コツコツ勉強する、早く開始する」などとても重要なことを話してくれたと思います。

しかしながら・・・、一番肝心なことを話した卒業生がどこまでいたでしょうか？話してもさりと流していたように思います。一番肝心なことは、何か？

心に火をつける

ということです。3分間、自分の将来について考えたことを話せるぐらい、心に火をつけてください。特に、2年生！修学旅行が終わった今がその時ですよ。もう、全国の高校2年生は、受験を意識し始めています。〇〇校生もスタートを切りましょう。